
HURRY UP!

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HURRY UP!

【Zコード】

Z3909L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

毎朝あの娘が気になつてついつい焦る日々。名前も知らない彼女だけれどそれでもいいと思つていたら。光GENJIの初期のアルバムの曲からヒントを得た曲です。

夢には思えなかつた。

彼女が田の前にいて僕に微笑んでくれている。

そして僕のことを見てくれていて。言つてきてくれた。

「好きよ」

「えつ！？」

僕は思わず声をあげてしまつた。

「今何て」

「貴方のことが好きよ」

また言つてきた。

「だから」

「だから？」

「付き合つて」

「こつ僕に言つてきた。確かにそう聞いた。

「私と。よかつたら」

「あの、それ本当？」

「嘘じやないわ。その証拠に」

微笑んで田を閉じてだつた。その小さくて奇麗な顔が近付いてきて。僕はそのことに夢みみたいに思つていていた。ここでだつた。田覚ましの五月蠅い音が聞こえてきてだつた。起きなことになつた。やつぱり夢だつた。

「ちえつ、何だつてんだよ」

僕はジャージのまま起き上がつた。起きながら言つのだつた。

「夢か、やつぱりな」

そのことがつかりしながらベッドから出でて壁を出てから下に降りてだ。リビングに入るともうテーブルの上に朝御飯があつた。

白い御飯に納豆にめざし、それと若布の味噌汁だった。見た目でかなり美味しそうだ。

それを見ながらだ。お母さんがもうテーブルに座つていてそこから僕に対しても言つてきた。

「おはよっ」

「うん、おはよっ」

「早く食べなさい」

朝に相応しい言葉だった。

「いいわね」

「わかってるよ」

僕もいつも言葉を返した。言葉を返しながら自分の席に座つて手を合わせる。それからパックの中の納豆をかき混ぜてそれから御飯にかけて食べる。めざしも一緒だ。

それをすぐに食べて歯を磨いて顔を洗つて。服を着てだつた。

「じゃあ行つて来るね」

「ええ。それにしてもよ」

「それにしても?」

「最近行くの早いわね」

お母さんの言葉だ。

「どうしたのよ」

「どうしたのつて?」

「部活朝ないでしょ」

「うん、ないよ」

それははつきりと言つた。僕は写真部だ。朝練があるような部活でもない。

自分が一番わかっていることだからだ。だから答えるのだった。

「それはね」

「じゃあどうして早いのよ」

「ちょっとね」

「ちょっと?」

「ああ、何でもないよ」

ここから先は言わなかつた。お母さんにも内緒だ。
それでだ。玄関に向かいながら言つた。

「行つて来るよ」

「ええ、行つてらつしゃい」

後ろからお父さんがリビングでいだきます、といつ言葉が聞こえてきた。僕はそれを聞きながら玄関を出てだつた。家の駐車場にある自転車に乗つてだ。すぐに家を出た。

家を出て全速力で走る。信号に気をつけながら。

風景を見ている余裕はなかつた。急がなくともいいのにについつい急いでだ。駅に向かう。

駅までは自転車で十分位だ。はつきり言つてすぐだ。それでも異様に長く感じる。とにかく早く駅まで辿り着かないと、と思つて仕方がない。

駅が見えてきた。脚がさらに速くなる。そつしてだ。

駐輪場に入つて自転車を止めて鍵を抜いて。その鍵を財布の中に入れてそれから駅に駆け込む。定期を通してそれからホームに向かう。

「よし、今日も間に合つたな」

時間を見たら電車が来る五分前だ。実は間に合つたビンゴじやない。

それでも僕にとっては間に合つたと言つていい状況だつた。心の問題だ。

列車の二両目が来る場所に立つてだ。扉は三番目だ。

そこに来ないと一日がはじまらない。他の人から見たらどうでもいいことでもだ。

そこに立つて電車を待つ。電車が来るのを待つ。

やつと来た。待ちかねた。電車がホームに入るのをじつと見ている・

それが来てだつた。停まるのを心待ちにして。停まつてから扉が

左右に開かれるまでがとても長かった。開くとすぐに中に入る。心が勇んでいるのが自分でもわかる。

そして中にいる、目の前の席に座っている彼女をちらりと見る。背が高くてはつきりとした大きな目で髪は豊かでそれを茶色煮してショートにしている。顔付きは背が高いのに可愛い感じで鼻が高い。制服は隣の高校のものだ。その娘をだ。

彼女を知らないふりをして見る。たったそれだけ。それだけだけれど僕は彼女を見て心の中で微笑んだ。そしてだつた。

それから学校に向かう。彼女のこととは隣の学校つてことしかわからない。他のことは全然だ。名前さえもわからない。言葉を交わすあてもない。

第一章

けれど僕にとつては彼女と会えることだけが楽しみだった。それを見てだ。

僕は学校に向かう。学校での一日は何もない平凡なものだけれど満足していた。彼女を見る、それだけでもう充分過ぎるものだつた。その僕にだ。周囲も言つてきた。

「御前最近明るいな」

「何かあつたのか?」

「あつ、何でもないよ」

僕はこう周りの言葉に返すだけだ。

「別にね」

「そうか? 何か最近な」

「雰囲気が違うんだよな」

「そうだよな」

皆そんな僕を見て首を傾げさせながら言つのだつた。

「何かな」

「違うんだよな」

「前とな」

「そつかな」

僕はとぼけてこう返すことにしてゐる。実際にそうしてゐる。

そんな日常だった。本当に周囲から見たら些細なことだけれど僕にとつてはとても大事なことだった。彼女の姿を見る、そのことだけだ。

そんなある日のことだつた。帰りの電車に乗る。帰りは何もない。だからゆっくりと帰る。

ところがだつた。その電車に乗ると田の前にだ。彼女がいた。そしてだ。にこりと笑つて僕に言つてきたのだ。

「はじめまして」

「えつ！？」

「前川麻里子です」

自分から名乗ってきた。はじめてその名前を聞いた。

「高校はもう御存知ですかね」

「う、うん」

戸惑いながら彼女に答えた。

「それは」

「御名前何ていうんですか？」

「弥生大輝」

問われるまま名乗つた。気が完全に動転している。その中の返答だった。

「そうだけれど」

「そうですか。弥生君ですか」

「う、うん」

「二年生ですか？」

今度は学園を聞いてきた。

「私二年ですけれど」

「同じなんだ」

ついつい言つてしまつた。

「それじゃあ

「そうですよね。あとですね」

「あと？」

「毎朝見てますよね」

单刀直入だつた。それを言われて本当に心臓が飛び出しそうになつた。

「私のこと」

「いや、それは

「いいですよ」

「ここでまたにこりと笑つてみせた彼女だつた。

「そのことは」

「いいつて」

「あのですね」

「完全に彼女のペースだった。そうして。

「それですけれど」

「それで？」

「これからも夕方も一緒になりませんか？」

「こう言ってきた。

「どうですか？一緒に」

「一緒にって」

「これからはちらりとじやなくてずっと見ていいですか？」

「あの、つまり」

「ここでやつと彼女が言いたいことがわかった。そうしてだつた。彼女はさらに言つてくる。僕に言わせることすらしない。学校もわかりましたし。名前も。ですから」

「そしてだつた。言つた言葉は。

「楽しく過ごししましょう。ずっと一人で」

「これで決まりだつた。僕は何と彼女の方から告白されてそれで一緒になつた。向こうも気付いていてそれで言われてだつた。それからは朝だけでなく夕方も急ぐことになつた。急がないではいられない困つたけれど嬉しい高校生活になつた。

HURRY UP! 完

2010・5・12

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3909/>

HURRY UP!

2010年10月8日15時03分発行